

# 民衆の発見：植民地経済と民俗学

山 崎 好 裕\*

はじめに

日本本土の近代化が一段落した大正末期から昭和初期にかけて、民衆文化への注目が一気に高まるという現象が見られた。学問的、文化的な民衆の発見と呼んでよい、こうした現象の背景にあるのは、どのような社会的、経済的な事態だったのだろうか。本論文は、そのことへの一つの仮説を提示し、検証することを目的にしている。

具体的に事例を列挙してみよう。もっとも目立つのは、柳田國男による日本民俗学の創始である。しかし、今和次郎は民家を図集化するなどしていたし、町田嘉章は各地の民謡を録音して新民謡運動を提唱していた。柳宗悦は戦後に繋がる民芸運動を開始したし、金融家の渋沢敬三は民具収集を行った。戯曲「夕鶴」で有名な木下順二は各地の民話蒐集を精力的に行ったし、日本民俗芸能学会が設立されて本田安次が初代会長に就任した。

現代経済化が日本において進行して無産労働者が増え、マルクス主義思想の普及が民衆への関心を高めたということは、もちろん指摘できるだろう。同様に、大正デモクラシーによって文化活動が特権階級だけのものでなくなり、大

---

\*福岡大学経済学部

衆文化が花開いたということもあっただろう。しかし、本論文では、この時期、台湾・朝鮮などの植民地への日本企業の進出が進み、現地の民衆統治を本格化させざるをえなくなったことを大きな原因としてあげておきたい。

西欧の例を見ても、植民地支配と民俗学や文化人類学の発展とが密接に結びついていることは間違いないと言ってよい。現在なお民俗学や文化人類学が持っているかもしれない偏向については、ポストコロニアリズムの諸思潮が批判的に取り扱っている通りである。本論文は、日本の植民地支配が現地民衆統治の困難に直面したとき、その精神世界、文化世界を理解し把握することが必要になり、それが民衆の発見に繋がったという仮説を提示する。つまり、外地における民衆の発見が反射的に国内に投影されて民衆文化研究に結実したということである。とりわけ、台湾と異なり、独立国としての長い歴史を有し、日本とははっきりと異なる独自の文化を発展させていた朝鮮の植民地支配の困難は、そこに住む朝鮮民衆の存在の大きさを否が応にもクローズアップしたことは想像に難くない。

## 1. 渋沢栄一と朝鮮植民地化

日本は明治9（1876）年の日朝修好条規の締結によって、円通貨の朝鮮国内での流通を認めさせたことで、来たるべき朝鮮植民地化の足掛かりを得た。内務卿の大久保利通は朝鮮への経済進出を大倉喜八郎に命じ、大倉は第一国立銀行の渋沢栄一に金融上の進出を呼び掛けた。だが、第一国立銀行の進出は大株主の三井の反対によって阻まれたため、当初は渋沢の個人的な業務として始まった。それでも、2年後には第一国立銀行釜山支店の開業に成功している<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 島田（2006）35ページ。

朝鮮での第一国立銀行は、明治17（1884）年から現地での砂金の買い入れを開始し、その2年後には日本銀行と地銀の買取契約を結んでいる。並行して仁川・釜山・元山3港の関税取扱い権を獲得して、この関税を抵当とした朝鮮政府向け貸し付けを始めた。渋沢はこのころから、朝鮮独自の銀行券発行を構想し始める<sup>2</sup>。

渋沢は当初から朝鮮への経済進出に熱心であったため、事業の立ち上げの過程で何度か困難に陥りながら、最終的にかなりの収益をあげるまでに、これを持っていつている。晩年のインタビューからは、渋沢が朝鮮の日本経済での重要性について、北海道や台湾と並ぶか、それ以上のものと考えていたことがわかる。しかし、渋沢は、政治家で軍人の山縣有朋などとは異なり、朝鮮を植民地化することには反対で、日本と同様の独立国としておかねばならないと考えていた。あくまでも、経済的な権益が重要であったということである<sup>3</sup>。

当時の日本輿論を考えると、渋沢のこの見解は突出してリベラルなものである。論客の福沢諭吉は『時事新報』に発表される論説を通じて、朝鮮に対する差別意識を民衆の間に醸成していた。渋沢の思想に近かったのは、伊藤博文の日露協商路線であり、そこでは日本がロシアなどの列強と協調して朝鮮を政治的に中立化することが目指されていた。しかし、日本民衆は圧倒的に、朝鮮を軍事的に制圧して政治的に支配することを望んでいたのである<sup>4</sup>。

渋沢は、朝鮮の政治的独立のためにも、日本が近代経済化の先達として朝鮮を導く必要性があると考えていた。自身何度か朝鮮を訪問して見聞したことから、韓国皇帝の威厳や政府高官の文人としての見識を褒めており、むしろ、朝鮮民衆を蔑む日本人を非難しているのである。さらに、明治39（1906）

---

<sup>2</sup> 同上、35-36ページ。

<sup>3</sup> 同上、37-38ページ。

<sup>4</sup> 同上、38ページ。

年、3回目の渡韓を終えて帰京する途中、神戸高等商業学校で学生に向かって次のような内容の演説をしている。すなわち、どうしても現在朝鮮で事業をしている日本人は、朝鮮人に対して腰掛主義や掠奪主義に走っている。これはよくない。わが同胞に接するように、居座主義や文明主義ということで、内地と同じような事業を行わなければならない、というのである。無論、この時点では朝鮮の日本併合はカウントダウンの段階であった<sup>5</sup>。

渋沢の娘婿である阪谷芳郎は積極的に論説を発表して、朝鮮への日本の経済進出と経済支配を推進しようとした。阪谷が明治25(1892)年に発表した朝鮮円系通貨圏論は、渋沢の第一国立銀行朝鮮支店が朝鮮銀行となり、円通貨を発行する上でのガイドラインとなっている。ただし、阪本の場合、渋沢と異なり、朝鮮が独自で近代国家となることは無理なので、日本の植民地として経済発展を行わしめて、結果として朝鮮民衆の生活を向上させるという考えであった。実際、論説での幾分過激な論調とは異なり、人物としての阪谷は、朝鮮民衆に対する稀に見る理解者であり、心から朝鮮民衆に対する親愛の情を寄せていたと評されるのである<sup>6</sup>。

## 2. 渋沢敬三と民衆文化への眼差し

渋沢敬三は、祖父・栄一の衣鉢を継いで戦前から戦後期にかけて日本経済の運営に尽力した一流の経済人である。若くして第一銀行の取締役となったのを皮切りに、その副頭取から日本銀行の副総裁、総裁を歴任した。昭和20(1940)年には請われて大蔵大臣に就任して、戦後日本経済の混乱收拾に邁進し、KDDの初代社長も務めている。同時に敬三は、自宅にアチックミュー

---

<sup>5</sup> 同上、39-40ページ。

<sup>6</sup> 同上、40-41ページ。

ジウムなる私設博物館を設け、博物学や民俗学の研究資料を収集した<sup>7</sup>。

敬三は明治29（1896）年、栄一の嫡男・篤二の長男として東京深川で生まれた。しかし、父・篤二が後継者として栄一から見限られたため、敬三が栄一の跡取りと目されるようになる。大正10（1921）年、東京帝国大学経済学部を卒業した敬三は横浜正金銀行に入行し、新婚の妻を伴ってロンドン支店に赴任した。4年後に帰国した敬三は、弱冠30歳で第一銀行取締役に就任する。その後は、36歳で常務取締役、45歳で副頭取といった具合であった。こうした財界人としての順調な昇進の一方で、ごく若いころから自邸物置の屋根裏に動植物標本、化石、郷土玩具などを収集し、同好の士たちと会合を重ねるようになる。注目すべきは、このアチックミュージアム活動の背後には、柳田國男の民俗学研究があったことである。敬三は柳田の民俗学にはマテリアルカルチャーの分野への目配りがたりないと考え、博物学的な方面への展開を自身は図ろうとしたのであった<sup>8,9</sup>。

敬三は休日を利用して農山漁村にもフィールド調査に出かけた。さらに、昭和8（1933）年にはフィールドを朝鮮まで拡大している。敬三の調査にも同行したミュージアム同人のなかからは、宮本常一、山口和雄、祝宮静、岩倉市郎といった著名な民俗学者が巣立っていった。他方で、敬三は祖父・栄一を顕彰する事業史博物館を構想して準備に入ったものの、戦局の悪化で断念したりもしている。こうした博物館事業の推進では、やはり、構想のままでは終わった延喜式博物館もあげることができる。栄一の顕彰については、経済史家である土屋喬雄に依頼して、昭和30（1955）年から刊行が開始された

---

<sup>7</sup> 谷澤（2015）、141ページ。

<sup>8</sup> 同上、142-143ページ。

<sup>9</sup> 昭和4（1929）年から敬三は祭魚洞なる号を用いるようになる。これはカワウソが採った魚を、天を祀るかのように岩に並べるといふ、獺祭伝説に基づくものである。

『渋沢栄一伝記資料』のかたちで実現させている<sup>10</sup>。

敬三は昭和17(1942)年、日本銀行副総裁になって第一銀行を退職した。そして、2年後には総裁に就任している。これは、戦時経済体制構築のために、財界に顔の効く敬三の貢献が期待されたためであった。時局が急を告げるなか、敬三もアチックミュージアムを日本語の日本常民文化研究所に名称変更せざるをえなかった。敬三と親しかった上記の土屋も、リベラルという理由で東京帝国大学を追われた。7カ月だけの大蔵大臣就任を理由に公職追放の処分を受けた敬三は、その期間を利用して、アチックミュージアムの民具2万点などのコレクションを元に、国立民族博物館の設立のために尽力している<sup>11</sup>。

等しく日本民俗学の発展に巨大な足跡を残した、渋沢敬三と柳田國男をここで比較しておこう。柳田は元々文学を志していたが、農政学者、農政官僚時代に農山村の人々の生活に触れることで民俗学という未開の沃野を切り開いていった。その民俗学方法論は、柳田の思想的背景を反映して、民衆生活の精神世界に、伝承や文字記録を通して肉薄するというものであった。これに対して、渋沢は、栄一の後継者として白羽の矢が立つまでは、魚類の研究を中心に生物学者として身を立てようと決心していた。だから、その民俗学研究の方法は科学的客観的なものであると言えよう。有形の物質文化に注目し、民具や標本の収集という客観的に多方面から分析可能なものに集中する。民衆が生きる現実世界と道具への着目は、朝鮮民衆と心を通わせた柳宗悦と多くの共通点を持っている。

---

<sup>10</sup> 同上、144-145ページ。

<sup>11</sup> 同上、145-147ページ。

### 3．柳宗悦と朝鮮民衆文化

宗教学者・柳宗悦は後に民芸運動の中心人物として知られるようになるが、当初は朝鮮の美の発見者として登場した。大正8（1919）年、朝鮮で三一運動が勃発すると、柳は『読売新聞』に朝鮮の美を讃え、朝鮮民衆の苦難に同情する文章を寄稿している<sup>12</sup>。柳にとって、朝鮮の美とは次のような内実を持つものであった。すなわち、それは、悲哀の美であり、自然の美であり、不二の美である。

柳が朝鮮民衆芸術に関心を持つようになったきっかけの一つが、浅川伯教という人物との出会いであった。雑誌『白樺』の愛読者にして美術教員であった浅川は、大正元（1912）年、彫刻家・新海竹太郎から彫刻を習い始める。同僚と美術教育で意見が対立した浅川は、翌年朝鮮に渡って、京城府立南大門尋常小学校に訓導として就職した。弟の浅川巧も、さらに翌年山梨県立農林学校を卒業するとすぐに朝鮮に渡り、総督府農商工部山林課林業試験所に技手として就職している。兄の伯教は同年、オーギュスト・ロダンが白樺派に送った彫刻を見せてもらうために、千葉県我孫子市の柳の自宅を訪ねる。このとき、浅川は李朝白磁の染付秋草文葫蘆瓶の断片など数点を手土産に持参した。柳はこの白磁片を見てインスピレーションを受けたのである<sup>13</sup>。

柳はすぐに朝鮮に渡って各所を巡り、朝鮮の美が常に悲哀を帯びているという直観を得ることになる。それはそこはかたない、女性的な曲線の美であり、その悲哀の根源に、朝鮮民衆の生活が歴史的に楽しさを欠いていたことを見出すのである。そして、当時、朝鮮は異民族である日本人の政治的支配下にあった。柳は、そこで不用意に、朝鮮人が政治を握ろうとするのではなく、本来の芸術活動に専念すべきであると書いてしまっている。しかし、この表

<sup>12</sup> 権（2017）、36ページ。

<sup>13</sup> 李（2009）、53-54ページ。

現は取り様によっては、朝鮮民衆に対して植民地支配に甘んじるように言っているを取られかねないものであった<sup>14</sup>。

後の民陶に結びつく、朝鮮陶磁器への愛情を柳は隠そうとしていない。それは、人工美ではなく、自然の美とでもいうものであり、根源には芸術品というより民衆の実用品としての生産が産んだ美しさなのである。千利休の侘茶の精神を、口を極めて批判する柳であるが、金海の井戸茶碗の美を高く評価しているのも柳なのである。朝鮮陶磁器の無作為の美は、朝鮮陶工の使う轆轤が不完全で、作陶に際して激しい振動を抑えられないために、巧まずして生まれていると、柳は考えた。この自然の美論が柳の民芸論に繋がり、昭和元（1926）年の日本民藝館設立に至ることは言うまでもない<sup>15</sup>。

第2次世界大戦後も、柳は朝鮮民衆の芸術がなぜこんなにも美しいかという理由を追い求めた。そうして、柳なりに到達したのが不二の美という論である。柳は美醜を分ける世界を二分法の世界と考え、朝鮮民衆が美しいとか醜いとか、そうした分別なしに黙々と実用品を生みだし続けたことにその答えを見出したのである。美しいものを作ろうという作為がないから、間違えるということもない。したがって、朝鮮の美は無謬の美でもある。また、芸術品を作ろうという目的もなく作品が作り出されるから、それはただそこにある美、只の美でもある。そうして、日本人と比較しても、朝鮮人はこのこだわり無さの傾向が強いと柳は言っている<sup>16</sup>。家を建てるときに、日本人なら先ず地ならしをして地面を平らにするという作業に時間をかける。しかし、朝鮮人は地面が傾いていれば傾いているなりに、デコボコであればデコボコなりに、頓着せず家を建てるというのである<sup>17</sup>。

---

<sup>14</sup> 権前掲論文、38-39ページ。

<sup>15</sup> 同上、41-43ページ。

<sup>16</sup> 同上、43-45ページ。

柳宗悦の朝鮮の美論は、日韓両国において第2次世界大戦後に展開を見せることになる。まず、日本においては、柳自身が率先して日本自体の民衆芸術を称揚する運動に取り組んでいくことになった。つまり、本論文が最も主張したいことであるが、柳自身を含めて、日本人は朝鮮民衆を鏡として、日本民衆とその文化世界を初めて発見したということである。他方、独立後の韓国においても、柳の朝鮮の美論を下敷きにしながら、民衆芸術論が、マスコミや研究者によって生成されていくようになる。それまで、王族や兩班の生み出した美術品に文化芸術的価値を見出してきた歴史とは全く独立に、民衆の文化世界に目を開き、そこに独自の価値を見出していくことがようやく始まったのである。

おわりに

渋沢栄一がそうであったように、朝鮮への日本の経済進出の当事者たちは、経済的に破綻している朝鮮を救済するという意識を有していた。こうした経済破綻は、言うまでもなく、王政や兩班支配の下で朝鮮が実に古代的な経済構造を継続させており、人口の圧倒的多数を占める朝鮮民衆の側に経済発展に繋がる富の蓄積が行われなかったためであった。

---

<sup>17</sup> 筆者も韓国の大学で、韓国語で講義をするほど、韓国の各地を周って事物を見聞したが、同じような感想を持ったことがある。たとえば、農村の庵のような建物に入ると、梁の木が皮を剥いただけの自然のままの状態、実に豪快に曲がっていることは珍しくない。だが、それはそれで、我々日本人にも美しく感じられるのである。日本人は西洋人に比べ、シンメトリーにこだわらず、むしろ、非対称性に美を感じると言われる。しかし、日本では自然木のこのように豪快な使い方はない。平らな面を削り出すなどした上で、微かな歪みを楽しむのがせいぜいだろう。この意味で、朝鮮の美は文字通りの自然の美、日本の美は設計によって生み出された、人工的な自然の美なのかもしれない。

渋沢栄一は朝鮮で事業を営む日本人に対して、掠奪的ではなく、朝鮮民衆を貴ぶ、地に足の着いた経済活動と呼び掛けた。皆が渋沢の呼びかけに応じたとは思わないが、日本が植民地化する以前は、朝鮮の王侯貴族自身が朝鮮民衆に対して掠奪的な支配を行っていたのである。

実際、現地で経済活動をする日本人の眼には、朝鮮民衆が自らの手で事業を起こし、近代経済を発展させていくなどということは全く不可能に映った。彼らは自覚的に動き、勤勉に働くことなど無理であると思われたからである。それは、長い間の身分制度を通じた支配で育まれた無気力構造だったかもしれない。

そうした経済行動の未来のなさに比べると、見る人から見れば、朝鮮民衆の工芸や芸能は非常に魅力的に映った。それらは素朴であり、嫌みのない即自的な生活欲求の発露であった。端的に美しかったのである。こうした対比から、柳宗悦の、朝鮮民衆は政治的な抵抗を止めて、彼らの文化芸術に専念した方が幸せだという言い方が生まれる。

渋沢栄一の孫・敬三もまた、そうした朝鮮でもフィールドワークを行った。敬三の場合、柳田と異なって精神文化よりも、民芸や民具といった即物的な収集に意味を見出していたから、朝鮮文物の収集はうってつけであった。これは、朝鮮陶磁器の研究から民芸運動に向かった柳と軌を一にしている。

こうして日本の知識人、研究者は、朝鮮において民衆の文化的価値というものを見出していく。植民地経済の発展がもたらした、学問的発展の必然であった。朝鮮における民衆の発見は、鏡で反射するようにして、日本民衆を文化的、学問的に発見していくことに繋がる。こうして、明治当初は二束三文で海外へと入り飛ばされていた江戸以降の民衆文化の成果物も、初めて日本人によって評価されることになり、保管と研究が進むことになったのである。ポストコロニアリズムの批判にもかかわらず、こうした点は善悪は別として、事実問題として評価されていい。

参照文献

- 権錫永「『朝鮮の美』をめぐる近代日本人の文化実践 柳宗悦、浅川伯教」『北海道大学文学研究科紀要』第152号、2017年、31-80ページ。
- 谷澤毅「渋沢敬三 財界人と学者のあいだ 『忙中』に『閑』を求めて」『長崎県立大学経済学論集』第48巻第4号、2015年、141-175ページ。
- 島田昌和「経済立国日本の経済学 渋沢栄一とアジア」杉山伸也編著『「帝国」の経済学』（岩波講座『「帝国」日本の学知』第2巻）、岩波書店、2006年、15-53ページ。
- 李尚珍「柳宗悦の朝鮮伝統芸術研究 浅川伯教・巧兄弟との繋がりを中心に」『山梨英和大学紀要』第8巻、2009年、51-64ページ。